

## 箱庭表現に関する一研究 — 大学生を対象として

番匠明美\*

## I. はじめに

ミニチュア玩具がクライアントの手を通して箱庭の砂の上に置かれた時、それら一つ一つが息を吹き込まれたように存在感を持ってくる。そして、玩具と玩具の間に生じた関係は、まるで文学作品の行間から汲み取られるもののように、深い意味を含んでいる。箱庭のなかの何も置かれぬ砂だけの領域が“何も置かれぬ”こと自体によって、単なる空白という視覚を越えて、見る者に何かを訴えてくることもある。身近な玩具が、限られた砂箱の中に配置されていくことによって、生きた玩具となり、一つの表現が生まれる。

ところで、青年期については、次のようなことがいわれている。

現実の自分と理想としての自分の姿との間で感じる不一致は、青年前期になって拡大し、その後成人期に至るまで、このズレをうめるべく努力が試みられる。そして、ここで自分自身をどれだけ統合されたものとして捉えることができるか、いわゆる自我意識の成熟は、青年後期における発達課題ともいえる同一性の感覚を獲得するうえで重要な要因である。

また、青年後期は、それまで多元的、分裂的であった自我が統合され、明確化するという過程の中にありながら、一方で個人には誕生から死に至るまで、全く普通の「自分自身」というものが存在することを認識しなければならない時期でもある。このような青年後期にある大学生は、表現全体が自己像ともいえる箱庭に、どのような世界を作り上げるのだろうか。

そこで、本研究では、大学生の中から、現実の

自分と理想の自分とのギャップの小さい群（差小群）とギャップの大きい群（差大群）を抽出し、その2群の箱庭表現の特徴を検討することを試みた。

まず、(1)差小群と差大群の2群の間で、「自分が感じている自分（つまり、より意識的に捉えられている自分）」にどのような差異が認められるかを質問紙法の一つであるY-G性格検査の結果からその特徴を検討する。次に(2)差小群と差大群の2群が、それぞれ如何なる箱庭表現を行なうかを所要時間、玩具数などの数量的側面、箱庭のなかに置かれた自分の像、使用された領域等の点から検討し、今後の箱庭理解の基礎的資料とすることを目的としている。

## II. 方法

## 1. S-D法による現実の自分の像と理想の自分の像の測定と、Y-G性格検査の実施

①被験者：K大学において、一般心理学を受講している学生220名（男子76名、女子144名）

②検査用具：Y-G性格検査用紙1枚。現実の自分の像と理想の自分の像をそれぞれ測定するS-D法評定用紙2枚。

③教示：Y-G性格検査実施後、次のような教示で測定を行なった。「現在の自分、ありのままの自分について尺度上の当てはまるところに○印をつけて下さい。」（現実の自分の像）、「こうありたいと思っている自分について尺度上の当てはまるところに○印をつけて下さい。」（理想の自分の像）

④結果の整理方法：7段階評価されたものを左から右へ、1点から7点とし、差異得点はそれぞれの項目について絶対値の差を求め、その合計に

\* 夙川学院短期大学・甲南大学学生相談室

よって得点化した。次に、差異得点の小さい者（差小群）男女各15名、差異得点の大きいもの（差大群）男女各15名、計60名を選び出した。また、Y-G性格検査の得点化は20点法を用いた。

## 2. 箱庭の実施

①被験者：前述の差小群 30名（男子15名、女子15名）、差大群 30名（男子15名、女子15名）の計60名の学生。

②実施場所：K大学内の行動観察室の一角に箱庭を設置して行なった。

③用具：箱庭用具一式（乾いた砂）（玩具は、人間類・動物類・植物類・建造物類・乗物類の5種類）、質問用紙、時計、カメラ。

④教示：教示は「ここにあるおもちゃと砂箱を使って何でも好きなように作って下さい。出来上がったなら教えてください。」と伝えた。被験者が最初の玩具を砂箱に置くまでの初発反応時間、制作完了を告げるまでの所要時間を腕時計で測定した。また、第一選択領域、玩具の使用順序、砂の使用、その他玩具の置き換えや取りのぞき等の被験者の行動特徴、制作中に話されたことなどを記録した。作品完成後、被験者に対して、以下の順に13項目の質問を行なった。

- (1) 自分の像の有無：「今、あなたが作られたこの中に、あなたがいいますか」
- (2) 自分のいる領域：「どこにいますか」、1で「いない」と答えた被験者に対しても「もし箱の中にあなたがいるとすれば、どこにいますか」と質問した。
- (3) 自分の活動状況：「あなたは、そこで何をしていますのですか」
- (4) 過去の自分のいる領域：「あなたは、そこにいる前は砂箱のどこにいたと思いますか」
- (5) 未来の自分のいる領域：「あなたは、この後そこから砂箱のどこへ行くと思いますか」
- (6) テーマ：「今あなたが作られたものについて何か説明して下さい」「題を付けてとするとどんな題をつけますか」

(7)重要領域：「あなたが作られたこの中で最も大切だと思われるのはどこですか」

(8) 箱の大きさ：「砂箱の大きさについてはどんな風に感じましたか」

(9). 好きな玩具：「好きなおもちゃがあれば言って下さい」

(10) 嫌いな玩具：「嫌いなおもちゃがあれば言って下さい」

(11) 欲しい玩具：「こんなおもちゃがあれば使いたかったと思うものがあれば言って下さい」

(12) 作品についての満足度：「あなたが作られたものを見て、次の5つの中でどれに最も近い感じがしますか。・非常に満足できる ・まあまあ満足できる ・特に何とも思わない ・少し不満足である ・非常に不満足である」また、どのような点で、満足あるいは不満足と感じているのか質問した。

(13) テーマはいつ考えたか：「このようなものを作ろうと考えたのは、いつ頃ですか」

最後に作っていて感じたことなど感想を求めた。

被験者が退室後、上部からと斜め上方から写真撮影、スケッチをし、玩具数、領域別玩具数、空白領域などを記録した。

⑤結果の整理方法：(1)領域について・砂箱の領域分割は、岡田（1972）の方法に基づいて行なった。まず、縦、横各々3等分する。縦については、左から右へ、Le、Mv、Riとし、横は上から下へ、Up、Mh、Loとする（Fig1, Fig2）。次に、全領域を9等分し、下段の左から、I、II、III、中段左から、IV、V、VI、上段左から、VII、VIII、IXとする（Fig3）。また、領域の意味については、バウムテストなど、様々な描画テストにおいて取り上げられているGrünwaldの空間図式を参考とする。(2)テーマ：テーマについての分類は、被験者の説明をもとに、実験者が分類した。

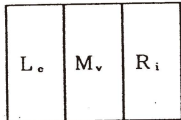


Fig 1 縦3分割

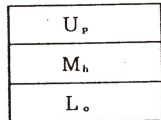


Fig 2 横3分割

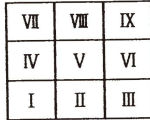


Fig 3 9分割

III. 結果と考察

1. Y-G性格検査との関連

220名の差異点の分布は、Table1に示す通りである。男子は、30～39点代が21.1%と最も多く、平均は43.11であった。女子は40～49点代が25.7%で最も多く、平均は41.69である。男子と女子の平均の差が1.42であったが、性差は認められなかった。

Table 1 差異点の分布 (220名)

		10~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~79	80~89	90~99	計	平均	SD
男	n	8	14	16	11	13	8	2	1	3	76	15.99	43.11
	%	10.5	18.4	21.1	14.5	17.1	10.5	2.6	1.3	3.9	100		
女	n	11	27	29	37	22	8	4	6	0	144	15.88	41.69
	%	7.6	18.1	20.1	25.7	15.6	5.6	2.8	4.2	0	100		
計	n	19	41	45	48	35	16	6	7	3	220	15.99	42.18
	%	8.6	18.6	20.5	21.8	15.9	7.3	2.7	3.2	1.4	100		

Table 2 Y-G類型別分布

		A	B	C	D	E	計
男	n	8	15	10	34	9	76
	%	10.5	19.7	13.2	44.7	11.8	100
女	n	35	28	15	54	12	144
	%	24.3	19.4	10.4	37.5	8.3	100
計	n	43	43	25	88	21	220
	%	19.5	19.5	11.4	40.0	9.5	100

次に、Y-G性格検査の類型別分布をTable2に示す。220名についてみると、男女共にD型が最も多く、次に男子ではB型が、女子ではA型が多くなっていることがわかる。次に、差小群と差大群の両群について、差異点の分布とY-G性格検査の類型別分布を示したのが、Table3、Table4、Fig4、Fig5である。

Table 3 差小群の分布 (差異点)

	10~29	20~29	計	分布	M	SD
男	5	10	15	16~29	21.6	4.21
女	9	6	15	15~22	19.2	1.72
計	14	16	30	15~28	20.4	3.43

Table 4 差大群の分布 (差異点)

	50~59	60~69	70~79	80~89	90~99	計	分布	M	SD
男	2	7	2	1	3	15	59~99	72.0	12.92
女	0	6	3	6	0	15	62~88	74.5	9.22
計	2	13	5	7	3	30	59~99	73.2	11.29

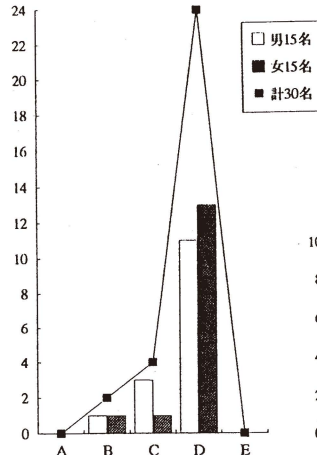
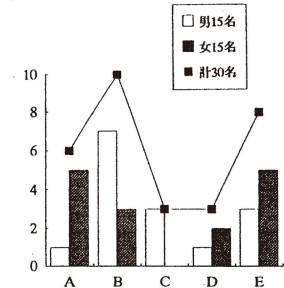


Fig 4 差小群の分布(Y-G類型) fig 5 差大群の分布(Y-G類型)



差小群と差大群については、0.1%水準で有意な差が認められた (Table3とTable4、F=573.61, df=1/56, P<0.001)。

Y-G類型については、差小群でD型が全体の80%を占め、A型とE型が一人も含まれていない。また、差大群については、C型とD型が全体の10%と少なく、B型が33.3%と最も多かった (Fig5)。差大群については性別によって類型に差異があるように思われたので、 $\chi^2$ 検定によって、性差を調べたが有意な差は認められなかった。そこで、差小群と差大群について、2群間のY-G類型に関して検定を行なった結果、0.1%水準で群間に有

意な差が認められた ( $x^2=35.81, df=4, p<0.001$ )。

なお、参考として220名を差異得点の大きい者55名 ( $Q_1$ 群)、中間の者110名 ( $Q_2$ 群)、小さい者55名 ( $Q_3$ 群)として、3群のY-G類型別分布を示したのがTable5である。3群とも、群内で性差は認められなかった。そこで3群間の検定を行った結果0.1%水準で3群間に有意な差が認められた。 ( $x^2=58.46, df=4, p<0.001$ )。また2群ごとの群間にも0.1%水準ですべて有意な差が認められた。

Table 5 Y-G類型別分布 ( $Q_1 \cdot Q_2 \cdot Q_3$ ; 220)

	A		B		C		D		E		計							
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計					
$Q_1$	4	9	13	8	8	16	3	1	4	3	5	8	7	7	14	25	30	55
$Q_2$	4	23	27	5	16	21	3	12	15	17	23	40	2	5	7	31	79	110
$Q_3$	0	3	3	2	4	6	4	2	6	14	26	40	0	0	0	20	35	55

Table 6 Y-G下位得点

		差小群	差大群
D	男	5.5	13.9
	女	5.7	18.9
C	男	6.4	12.3
	女	7.6	14.4
I	男	3.9	10.3
	女	5.9	13.4
N	男	4.8	12.3
	女	6.2	13.0
O	男	5.3	9.9
	女	6.1	8.9
Co	男	4.9	9.4
	女	3.1	7.1
Ag	男	10.2	11.5
	女	10.1	10.8
G	男	13.5	6.3
	女	13.2	6.2
R	男	13.5	11.7
	女	12.8	13.9
T	男	11.5	8.9
	女	10.4	9.1
A	男	13.2	7.9
	女	14.3	7.7
S	男	16.1	13.1
	女	16.7	10.1

次に、差小群と差大群のY-G下位尺度の得点をTable6に示す。差大群は、差小群に比べて、D (抑映性)、C (気分の変化)、I (劣等感)、N (神経質)、O (主観性)、C (非協調性)、G (非活動性)、T (思考的内向)、A (服従性)、S (社会的内向) が有意に大きい。そして、Ag (攻撃性)、R (のんきさ) については、有意な差は認められなかった。また、I (劣等感) は性差についても、女子に有意に大きかった。

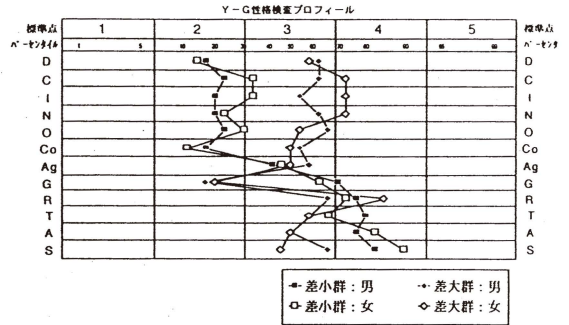


Fig 6 差小群と差大群の平均プロフィール

Fig6は、Table6をプロフィールとして図示したものである。類型別にみると、差小群の男子はD型、女子はAD型、差大群の男子はA型、女子はA”型である。すなわち、DCINOCの情緒性二次因子では、差小群が情緒安定社会的適応の側に、差大群は不安定不適応の側に傾いている。そして、下半の向性二次因子については、差小群は活動性外向性の傾向を示している。

以上の結果から、Y-G性格検査からみた2群の特徴として、次のようなことが言える。

現実的な自分の像と理想的な自分の像とのギャップが小さくより一致した自分を感じている群としてとらえている差小群は、Y-G性格検査の結果からも、抑鬱性や劣等感が少なく、気分が安定しており、客観的で協調性に富む、よく適応した人として「自分」を感じていることが窺われた。これに対して、差大群は、女子にA型、E型が多く、男子にB型が多いといった性格の類型にばらつきが見られた。差小群の80%がD型であることと比較すると、現実的な自分の像と理想的な自分の像とのギャップが大きい群からは、「自分」をどう見ているかという点に関して、1つの特徴を見出すことは出来なかった。しかしながら全体的な傾向としては、差大群では本人が持っている安定感や適応している感じが、差小群よりも低いように思われる。

次に、このような2群がいかなる箱庭の表現を行なったかについて見ていく。

2. 箱庭作品の種々の分析

(1)初発反応時間、所要時間、使用玩具数及び種類について

箱庭制作の所要時間、使用玩具数及び種類の3項目については、すべて有意な差は見られなかった。初発反応時間については、差小群は女子の方が長い、差大群では男子の方が長い傾向が見られた ( $F=3.27, df=1/56, 0.1 < p < 0.05$ ) (Table7)。初発反応時間、所要時間、玩具数について、分散が大きいので、それぞれのレンジを求めたのがTable8である。有意な差は見られなかったが、一般的に差大群の女子にとりかかりが早く、使用する玩具数、種類共に少なく、出来上がりも早いという傾向がみられた。

Table 7 差小群と差大群の箱庭制作における初発反応時間、所要時間、使用玩具数及び種類

	差大群				差小群				
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
初発反応時間	43.53	34.33	73.13	93.32	65.40	88.77	31.93	21.66	(秒)
所要時間	15.93	10.00	17.27	11.73	16.00	14.28	10.27	6.57	(分)
玩具数	43.87	23.35	43.80	23.90	42.27	28.82	33.20	12.20	
玩具の種類	3.80	1.28	3.90	1.00	4.00	1.03	3.40	0.95	

Table 8 差小群と差大群の初発反応時間等のレンジ

	差小群		差大群		
	男	女	男	女	
初発反応時間	3~130	5~390	8~390	3~65	(秒)
所要時間	4~33	6~55	3~55	4~32	(分)
玩具数	9~94	16~111	9~99	10~67	

ところで、初発反応時間までの被験者の態度は、箱庭に対してどのような取り組み方をするのか、その最初の姿勢を知るうえで興味あることであった。差小群の男子は、いち早く自分に与えられた課題として受け入れ、玩具を使用していく、また女子も男子同様課題としてすぐに受け入れるが、

まずどんな風に創ろうかと考える。これに対して、差大群の男子は箱庭に対して戸惑いが大きく、女子は戸惑いながらも自分の好きなようにやろうという姿勢が感じられた。このような態度の違いは、差小群が自分をどちらかという外向的で活動性があると感じているのに対して、差大群は比較的内向的で非活動的であると感じていることと関連があるかもしれない。

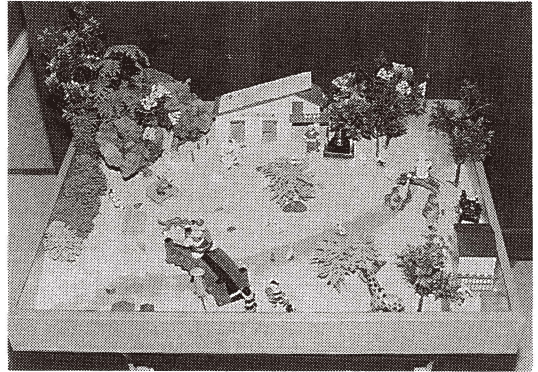


Fig 7 差小群 女子

Fig7は、差小群の女子の作品である。初発反応時間は100秒、所要時間が55分と長く、4種類の玩具を111個と多数使用して制作している。作品にとりかかるまでに、じっくりと構想をたて、制作中は没頭しているように感じられた。個々の玩具が表情を持って、全体的ににぎやかで楽しくまとまった感じのする作品である。製作者は「とてもおもしろかった。満足できるものが創れた」と感想を述べている。

次に、玩具の種類別使用数について示したのがTable9である。差小群については、建造物類(41.4%)が半数近くを占め、次に動物類(23.3%)、植物類(22.9%)、人間類(7.4%)、乗り物類(5.2%)と続く。差大群も、建造物類(38.7%)が最も多く、次に植物類(27.6%)、動物類(17.9%)、人間類(11.3%)、乗り物類(4.7%)となっている。玩具の種類別使用数では、有意な差は認められなかった。人間類については、

女子よりも男子が多く使用し ( $F=4.18, df=1/56, p<0.05$ ) 植物類については差小群で女子の方が、差大群で男子の方が多く使用するというように交互作用が認められた ( $F=6.66, df=1/56, p<0.05$ )。また、乗り物類では、男子が女子よりも有意に多く使用している ( $F=10.64, df=1/56, p<0.01$ )。玩具を使用した割合で差小群と差大群を比較してみると、動物類の差が5.4%と最も大きく、次に植物類の4.7%人間類に3.9%の差が見られる。

Table 9 差小群と差大群の玩具の種類別使用数

	人間類		動物類		植物類		建造物類		乗り物類	
	差小群	差大群	差小群	差大群	差小群	差大群	差小群	差大群	差小群	差大群
男	M 3.93 SD 5.66	6.20 6.91	9.73 8.89	6.07 5.74	7.80 5.02	12.07 8.34	19.07 18.36	15.07 16.27	3.33 4.19	3.00 2.85
女	M 2.53 SD 3.20	2.33 3.09	10.67 9.87	7.47 6.57	12.27 5.38	8.73 3.71	17.20 13.92	14.13 11.56	1.20 1.72	0.53 1.04
計	M 3.23 % 7.40	4.27 11.30	10.20 23.30	6.77 17.90	10.04 22.90	10.40 27.60	18.14 41.40	14.60 38.70	2.27 5.20	1.77 4.70

次に、特に使用状況に偏りの見られる個々の玩具について調べた。

植物類の芝生は、差小群では11人 (36.7%) が使用しているのに対して、差大群では1人 (3.3%) だけで、群間に有意な差が認められた ( $X^2=10.42, df=1, p<0.01$ )。建造物類の柵の使用では、差小群が18人 (60.0%) と半数以上が使用しているのに対して差大群では9人 (30.0%) と、5%水準で有意な差がみられた ( $X^2=5.45, df=1, p<0.05$ )。また、学校・病院・農場・ガソリンスタンドのような大きな建物は、差小群 (15人、50.0%) が、差大群 (9人、30.0%) よりも多く使用するが、住宅など小さな家屋については、逆に差大群 (23人、76.7%) が差小群 (17人、56.7%) よりも多く利用する傾向が見られた。小さな家屋 ( $X^2=4.8, df=1, p<0.05$ ) や植物類の花木 ( $X^2=3, df=1, 0.10<p<0.05$ )、動物類の家畜 ( $X^2=5.45, df=1, p<0.05$ ) は男子よりも女子に多く利用された。これに対して、人間類の戦う人 ( $X^2=5.82, df=1, p<0.05$ )、動物類の猛獣 ( $X^2=3.35, df=1, 0.10<p<0.05$ )、建造物の鳥居・白・塔・灯籠 ( $X^2=5.45, df=1, 0.10<p<$

$0.05$ )、や乗り物類の戦いに関するもの ( $X^2=8.37, df=1, p<0.05$ ) は女子よりも男子に多く使用された。箱庭の中に置かれた動物は、本能的な部分や、活動性、生命力といった、その人の持っているエネルギーを表現すると考えられるが、情緒的に安定し活動的であると自らを捉えている差小群が、差大群よりも多くの動物を使用するという傾向が本実験の結果でも得られた。植物類の芝生は、緑色で、箱庭の約9分の1 (1領域分) を覆う大きさである。この芝生が箱庭の中に置かれると、作品に一見豊かな生き生きとした印象が与えられる。この玩具がよく使用された差小群の作品からは内的な活力といったものが自然なかたちで表現され、全般的に明るく無難にまとめられているという印象を受けた。

柵は箱庭の中で領域を分ける場合に最もよく利用される玩具で、一般的には家などを囲んでいることが多い。個々にとっての大切な部分を囲む場合などは、柵の使用によって、箱庭の中に自分の重要な領域を確保し、守るという意味合いを表現していることが考えられる。また、岡田 (1980) は、自我の発達に応じて柵の使用が増加する傾向を指摘している。以上のようなことを両群の柵の使用数と関連づけて考えてみると、差小群が比較的明確な枠組をもった「自分」というものを捉えているのに対して、差大群は「自分」を漠然としたとらえどころのないものとして感じていることが窺える。

(2)自分の像について

箱庭制作後の質問「今、あなたが創られたこの中に、あなたが居ますか」に「いる」と答えた者をSE群、「いない」と答えた者はSN群とする。そして、自分の像を具体的に玩具で表現した者をP群、玩具を示さず、自己領域だけを示した者をZ群とした。例えば、SE-P群とは、箱庭の中に具体的を玩具を指して自分がいると答えた者である。また、SN群に対しては「もし、いるとするとどこにいると思うか」と質問したところ、差

小群の男女各1名ずつが「外から見ている」と答えた以外は「ここにいる」と玩具を示す(SN-P群)か、自己領域が示された(SN-Z群)。

Table 10 差小群と差大群のSE群とSN群の人数

	差小群n=30		差大群n=30	
	男	女	男	女
SE	6 計10	4 33.3%	5 計9	4 30.0%
SN	9 計20	11 66.7%	10 計21	11 70.0%

Table10は、差小群と差大群それぞれで、SE群とSN群の人数を示す。最初の質問で自分の像があるといった者が、両群共にほぼ3分の1を占めており、群間に有意な差はみられなかった。最初に「自分はいない」と答えた場合も「もし、いるとすれば」の質問に対しては、ほとんどの者が抵抗なく自分のいる領域を示した。箱庭の作品は被験者が存在する世界とほぼ重なる、あるいは一部と考えるとよいかもしれない。

Table 11 SE群について

	差小群n=10		差大群n=9	
	男	女	男	女
P	5 計7	2 70.0%	2 計5	3 55.6%
Z	1 計3	2 30.0%	3 計4	1 44.4%

Table 12 SN群について

	差小群n=20		差大群n=21	
	男	女	男	女
P	3 計4	1 20.0%	1 計2	1 9.5%
Z	6 計16	10 80.0%	9 計19	10 90.5%

Table 13 差小群と差大群について

	差小群n=30		差大群n=30	
	男	女	男	女
P	8 計11	3 36.7%	3 計7	4 23.3%
Z	7 計19	12 63.5%	12 計23	11 76.7%

次に、SE群、SN群でそれぞれ実際に自分の像を示す玩具を置いたかどうかを示したのがTable11とTable12である。SE群では差小群で実際に玩具を用いた自分を示した者が7人(70.0%)、差大群では5人(55.6%)であった。SN群では、箱庭制作後の質問に対してでぶんの像を玩具で示した者は、差小群で4人(20.0%)、差大群で2人(9.5%)となっており、大部分が自分のいる領域で示していた。差小群と差大群について、P群、Z群の人数を示したのがTable13である。

Table 14 SE-P群の自分の像玩具内容

差小群n=7		差大群n=5	
男	女	男	女
白い男 羊駝の男 パンダ ペンギン 怪獣	赤い金太郎 怪獣	白い男 手のない人形	女の人 羊 亀

次に、SE-P群における、自分の像を表した玩具の内容をTable14に示す。箱庭の表現では多くの場合同性の人形が「自分」であると指摘される。しかし、自分自身を象徴するようなものとして、あるいは制作者のいまだ意識化されていない面が強調されているような場合には、動物などのミニチュアによって「自分」が表現されることもある。今回の実験では、制作後自分の像について、被験者から自発的に説明が加えられたのは、すべて動物類を置いた場合であった。被験者自身に、自分の像として人物ではなく動物を用いたことに関して、何かこだわりがあるように感じられ、興

味深い結果であった。たとえば、パンダとペンギン(Table14)については、共に「男性の」と説明が付け加えられた。そして、どちらも隣に女性のパンダとペンギンをそれぞれ並べて置き、「一人ではさみしいから」と説明されたのは注目される。また、怪獣(Table14)は「何でもつぶしたい気がするから」という男性被験者と、「自分に似ているから」という女性被験者が使用している。羊(Table14)は「仲間からはずれて一匹だけいるのが私と似ている気がしたから」との理由で用いられた。

次に、自分の像の活動内容についてであるが個々の具体的な活動については付表1を参照されたい。ここでは「見ている、寝ている」といった静的な行動をする者と、何らかの活動的な行動をする者の2群に分類して検討した。その結果を(Table15・Table16・Table17)に示す。SE群、SN群共に差小群では半数以上の者が「エサをやる」などの活動をしている。これに対して、差大群では「見ている、寝ている」が半数以上を占めている。差小群と差大群について検討してみると、差小群が「仕事をする」などの活動性を有意に多く示した。(X<sup>2</sup>=4.28, df=1, p<0.05)。

Table 15 SE群の活動

	差小群n=10		差大群n=9	
	男	女	男	女
見て寝て	0	2	4	1
	計 2	20.0%	計 5	55.6%
その他	6	2	1	3
	計 8	80.0%	計 4	44.4%

Table 16 SN群の活動

	差小群n=20		差大群n=21	
	男	女	男	女
見て寝て	4	4	6	7
	計 8	40.0%	計 13	61.9%
その他	5	7	4	4
	計 12	60.0%	計 8	38.1%

Table 17 差小群と差大群の活動

	差小群n=30		差大群n=30	
	男	女	男	女
見て寝て	4	6	10	8
	計 10	33.3%	計 18	60.0%
その他	11	9	5	7
	計 20	66.7%	計 12	40.0%

被験者が自分の像あるいは自分のいる領域を示す時は「～の前」などのように他の玩具との関係から述べられることがある。そこで、被験者の説明をもとに自分の像と最も関連があると思われる玩具について示した(Table18)。これについては、差小群と差大群の2群間に有意な差が認められた(X<sup>2</sup>=16.59, df=7, p<0.05) Table18において「車の中」以上の項目を自分の像が他の玩具のもとにあるという意味で、「人の横」以下の項目を自分の像が独自に位置付けられている場合として、2群に分類した結果がTable19である。X<sup>2</sup>検定の結果、有意な群間差が認められ(X<sup>2</sup>=8.88, df=1, p<0.01)、差大群が差小群よりも家の中などに「自分」を求めやすいことがわかった。

Table 18 自分の像、領域と関連のある玩具

	差小群 n=28					差大群 n=30				
	SE	SN	SE	SN	計 %	SE	SN	SE	SN	計 %
家の中	0	1	1	2	4 14.3	2	2	1	3	8 26.7
家の前	0	0	0	0	0 0.0	0	1	0	2	3 10.0
草木の下・横	0	1	0	0	1 3.6	1	3	0	2	6 20.0
草木の上	0	0	0	0	0 0.0	1	0	0	0	1 3.3
車の中	0	0	0	1	1 3.6	0	0	0	0	0 0.0
人の横	0	1	0	0	1 3.6	0	0	1	0	1 3.3
動物の横	3	0	0	4	7 25.0	1	0	1	1	3 10.0
その他	3	5	3	3	15 53.6	0	4	1	3	8 26.7

Table 19 自分の像・領域と関連のある玩具

	差小群n=28		差大群n=30	
	男	女	男	女
家の中等	2	4	10	8
	計 6	21.4%	計 18	60.0%
その他	12	10	5	7
	計 22	78.6%	計 12	40.0%



家や木のそばに「自分」を置くことは、自分自身を支えるものを何か必要としていると考えることも出来る。また「家」は大学生にとってもある意味で自分を守る場であり、そこを離れて社会へ出ていく拠点でもある。差小群が箱庭により独立した形で「自分」を置き、差大群が家や木など、安定感を与える玩具のそばに「自分」を置いたことは、前述の活動内容や柵の使用からいえる両群の「自分」の捉え方と合わせて興味深い結果である。

(3)領域について

差小群と差大群の各領域別使用割合を示したのがTable20とTable21である。箱庭を均等に用いたとすると、9分割では1領域11.1%、3分割りでは33.3%の割合で玩具が置かれることになる。差小群では、Mh(37.90%)特にv(13.12%)に玩具が多く、ii(8.39%)に少なかった。差大群では、Mh(42.66%)への集中がみられ、ix(8.31%)に少なかった。両群共、Mhの使用割合が大きい、差小群はやや右側に、差大群は左側にかたよって玩具の使用が多いという違いがみられる。LeとRiに、33.3%以上の割合で玩具を置いた人数を両群で比較してみると、Leについては差小群が11人、差大群が13人であった。また、Riでは差小群の19人、差大群の8人が右側に33.3%以上の割合で玩具を置いており、両群間に有意な差が認められた。 $(X^2=8.15, df=1, p<0.01)$ 。

Table 20 差小群の使用割合

Ⅶ 8.76	Ⅷ 11.25	Ⅸ 11.37	Up 31.38
Ⅳ 11.94	Ⅴ 13.12	Ⅵ 12.86	Mh 37.92
Ⅰ 10.67	Ⅱ 8.39	Ⅲ 12.34	Lo 31.40
Le 31.37	Mv 32.76	Ri 36.57	% 100.00

Table 21 差大群の使用割合

Ⅶ 8.76	Ⅷ 9.94	Ⅸ 8.31	Up 27.01
Ⅳ 15.15	Ⅴ 15.02	Ⅵ 12.49	Mh 42.66
Ⅰ 11.57	Ⅱ 9.31	Ⅲ 8.80	Lo 29.68
Le 35.48	Mv 34.27	Ri 29.60	% 100.00

Grünwaldの図式を利用すると、両群共、過去-未来などの方向性を示す水平線上に、その中でも差大群は未来・外向を示す右側により多くの玩具を置く傾向がみられた。これは両群がY-G性格検査で示した。内向性-外向性の結果と対応している。

次に、空白領域の有無についてTable22に示す。空白領域とは玩具が全く置かれなかった領域のことで、これは、玩具の領域使用に偏りがあることと対応して生じてくる。

空白領域の有った者は差小群で6名、差大群で11名であった。その中で、空白領域が2領域以上である場合は、差小群は無く、差大群では7名で、差大群に領域使用の偏りが多くみられることが窺える( $X^2=4.29, df=1, p<0.05$ )。

Table 22 差小群と差大群の空白領域について

	差小群			差大群			
	男	女	計	男	女	計	
空白無	14	10	24	11	8	19	(人)
空白有	1	5	6	4	7	11	(人)
空白2以上	0	0	0	2	5	7	(人)
領域総数	1	5	6	10	15	25	
一人当り平均	0.20			0.83			

Table 23 差小群の空白領域の分布

Ⅶ 1	Ⅷ 1	Ⅸ 0	Up 2
Ⅳ 0	V 0	Ⅵ 0	Mh 0
I 2	Ⅱ 1	Ⅲ 1	Lo 4
Le 3	Mv 2	Ri 1	6

Table 24 差大群の空白領域の分布

Ⅶ 3	Ⅷ 4	Ⅸ 5	Up 12
Ⅳ 0	V 0	Ⅵ 1	Mh 1
I 2	Ⅱ 6	Ⅲ 4	Lo 12
Le 5	Mv 10	Ri 10	25

次に、空白領域の分布をTable23とTable24に示す。差大群ではUpとLoに空白領域が多く( $X^2=9.72$ ,  $df=2$ ,  $p<0.01$ )前述の玩具使用割合と共に考えると、差大群がMhに玩具を多く置く傾向が明瞭となる。

空白領域と関連して、被験者が箱の大きさをどのように感じたかをTable25に示す。両群共に「ちょうどよい」と感じる者が半数以上を占めている。藤井(1976)は、小中学生では箱庭空間に対する印象と、空白領域についての結果は対応していると述べている。しかし、本実験の大学生では空白領域が多いことは箱を大きく感じたことと対応せず、むしろ空白領域に何らかの意味合いがこめられていると思われる。

Table 25 箱の大きさに対する感じ

	大きい	ちょうど	小さい
差小群	8人 26.7%	16人 53.3%	6人 20.0%
差大群	5人 16.7%	21人 70.0%	4人 13.3%

Table 26 差小群の第一選択領域数

Ⅶ 39.0	Ⅷ 14.6	Ⅸ 2.4	Up23 56.1
Ⅳ 2.4	V 14.6	Ⅵ 7.4	Mh10 24.4
I 12.2	Ⅱ 4.9	Ⅲ 2.4	Lo 19.5
Le22 53.7	Mv14 34.1	Ri 12.2	41 100%

Table 27 差大群の第一選択領域数

Ⅶ 7.7	Ⅷ 12.8	Ⅸ 17.9	Up15 38.5
Ⅳ 7.7	V 20.5	Ⅵ 7.7	Mh14 35.9
I 15.4	Ⅱ 0.0	Ⅲ 10.3	Lo10 25.6
Le12 30.8	Mv13 33.3	Ri14 35.9	39 100%

次に、第一選択領域について、各領域の使用数をTable26・Table27に示した。第一選択領域とは被験者がまず箱庭のどこに玩具を置いたかを示すものである。ある被験者は、制作後「まず初めに玩具を置いたところからイメージが広がって作品が出来上がった」と感想を述べた。このように第一選択領域はその後のイメージの流れ、被験者の箱庭の世界を方向づける意味から重要な領域といえるだろう。最も多く選ばれた領域は、差小群ではⅦ、差大群では中心のVであった。差小群は箱庭の左側( $X^2=10.56$ ,  $df=2$ ,  $p<0.01$ )と上側( $X^2=9.68$ ,  $df=2$ ,  $p<0.01$ )を多く選んでいる。また、差大群の群内に有意な差は認められなかったが、差大群の男子は上側を多く選んでいる( $X^2=6.25$ ,  $df=2$ ,  $p<0.05$ )。両群共、箱の上部すなわち製作者から遠い領域にまず玩具を置く傾向がみられる。特に差小群が「生への傍観」「空虚性」を意味する領域に玩具を置いてから制作を始めていることは注目される。

Table 28 種類別、玩具使用順位数(1位、2位)

	人間類		動物類		植物類		建造物類		乗り物類	
差小群 1位	0	0.0%	0	0.0	19	63.3	11	36.7	0	0.0
2位	0	0.0%	3	10.0	19	63.3	5	16.5	3	10.0
差大群 1位	0	0.0%	1	3.3	19	63.3	10	33.3	0	0.0
2位	0	0.0%	1	3.3	18	60.0	10	33.3	1	3.3

第一選択領域と関連して、使用した玩具を第二番目まで種類別に示したのがTable28である。表より、一番初めに使用される玩具は植物類・建造物類が圧倒的に多いことがわかる。この傾向は、岩堂ら(1971)の研究とも一致している。このように大学生群が全体的に装飾性の高い植物類や建造物類を利用して箱庭の制作を始めることはよりまとまりのある作品としての完成を箱庭にもとめていることの表れかもしれない。

次に、被験者自身が大切であると感じている重要領域について示す(Table29・Table30)。差小群では中心のV(25.5%)、Mh( $X^2=7.67$ ,  $df=2$ ,  $p<$

0.05)を、差大群ではV (22.7%)、Up・Mh ( $X^2=7.66, df=2, p<0.05$ )を重要領域とする者が多かった。差小群は箱庭の中心をより重要と感じやすいが、差大群は箱庭の上部を重要と感じ、第一選択領域と類似の傾向を示している。

Table 31 差小群の重要領域

W 2 6.7	W 3 10.0	K 4 13.3	Up 9 30.0
V 4 13.3	V 9 30.0	V 7 23.3	Mh20 66.7
I 1 3.3	II 0 0.0	III 0 0.0	Lo 1 3.3
Le 7 23.3	Mv12 40.0	Ri11 36.7	30 100%

Table 32 差大群の自分の領域

W 3 10.0	W 2 6.7	K 4 13.3	Up 9 30.0
V 3 10.0	V 6 20.0	V 4 13.3	Mh13 43.3
I 5 16.7	II 1 3.3	III 2 6.7	Lo 8 26.7
Le11 36.7	Mv 9 30.0	Ri10 33.3	30 100%

Table 33 差小群の過去の自分の領域

W 3 10.3	W 7 24.1	K 5 17.2	Up15 51.7
V 2 6.9	V 4 13.8	V 3 10.3	Mh 9 31.0
I 3 10.3	II 0 0.0	III 2 6.9	Lo 5 17.2
Le 8 27.6	Mv11 37.9	Ri10 34.5	29 100%

Table 34 差大群の過去の自分の領域

W 7 20.6	W 4 11.8	K 4 11.8	Up15 44.1
V 3 8.8	V 4 11.8	V 2 5.9	Mh 9 26.5
I 4 11.8	II 4 11.8	III 2 5.9	Lo10 29.4
Le14 41.2	Mv12 35.3	Ri 8 23.5	34 100%

Table 35 差小群の未来の自分の領域

W 2 5.9	W 7 20.6	K 4 11.8	Up13 38.2
V 5 14.7	V 3 8.3	V 4 11.8	Mh12 35.3
I 4 11.8	II 3 8.3	III 2 5.9	Lo 9 26.5
Le11 32.4	Mv13 38.2	Ri10 29.4	34 100%

Table 36 差大群の未来の自分の領域

W 3 10.0	W 2 6.7	K 5 16.7	Up10 33.3
V 1 3.3	V 7 23.3	V 3 10.0	Mh11 36.7
I 4 13.3	II 2 6.7	III 3 10.0	Lo 9 30.0
Le 8 26.6	Mv11 36.7	Ri11 36.7	30 100%

Table31~36は、差小群と差大群の自分のいる領域、過去・未来の自分のいる領域を示したものである。差小群は、差大群よりも有意に多くMhを自分のいる領域とし ( $X^2=6.93, df=2, p<0.05$ )、箱庭の上部を過去の自分のいる領域とする傾向がみられた ( $X^2=5.22, df=2, 0.10<p<0.05$ )。差大群についてはとくに有意な傾向はみられなかった。しかし、自分のいる領域が左下端から右上端へ、Grünwaldの図式では発端から終末の方向性をもつ対角線上で頻度が高くなっており、同様のことが

第一選択領域・未来領域についてもいえる。

次に、領域選択について、最も使用頻度の高い領域をそれぞれ示したのがTable37である。自分のいる領域、過去・未来の自分のいる領域は制作後に質問したものであり、制作者が時間的な流れを考慮していたかどうかかわからないが、過去-現在-未来と捉えると、差小群ではVIII→V→VIII、差大群ではVIII→V→Vの方向性が示された。両群共、重要領域と自分のいる領域として箱庭の中心であるVを最も多く選んでおり、特に差大群は過去の自分のいる領域以外すべてを最も多く選択している。

自分のいる領域を重要と感じているかどうかについては、特に有意な差はみられなかったが差小群では約3分の1が、差大群では約半数が自分のいる領域と重要領域に一致した領域を選んでいる。

領域の使用に関して、作品全体から受けた印象としては、差小群が比較的箱庭を均等に使用したのに対して、差男群では使用された領域に個々人の特徴が出ていたように思われた。

(5)テーマについて

作品のテーマ別に、差小群、差大群をそれぞれ分類した結果は、Table38に示す通りである。

Table 37 最も使用頻度の高い領域 Table 38 差小群と差大群のテーマ分類

	差小群	差大群
第一選択領域	VII	V
重要領域	V	V
自分の領域	V	V
過去の自分の領域	VIII	VII
未来の自分の領域	VIII	V

テーマ	差小群	差大群
家と庭	3人	1人
庭園と公園	1	2
町・村の風景	8	8
農場・田園風景	7	9
自然の風景	2	2
平和の中の危機	3	1
自然破壊	1	1
戦い・対立	3	2
好きな玩具で・	0	4
壁	1	0
さみしい	1	0

両群ともに「町・村の風景」と「農牧場・田園風景」テーマがほぼ半数を占めている。特に、「農牧場・田園風景」のテーマでは、「こんな生活にあこがれる」と説明されることがしばしばあった。そして、女子の場合「大草原の小さな家」や「アルプスの少女ハイジ」をイメージして制作されたものが多かった。「平和の中の危機」「自然破壊」「戦い・対立」のテーマは、何らかの意味で被験者が危機感を感じていると思われるテーマであった。これらのテーマでは、一方で自然を破壊する人間と、それに無関心な人々、あるいは、現代社会を象徴する汽車が動物界に侵入したり、動物が気づかぬうちに、人間が侵略するなど、他のテーマに比べて、作品の中に物語性や複雑な意味が込められていた。Fig7は「和やかな中にも危機をはらんでいる」と題された作品で、左下端のヤモリが危機を示している。遠くから見た時(Fig7)は非常に明るい感じを受ける作品だが、近づいてみると、始めてこの危機の存在に気づく。被験者は、体育系クラブに所属する1回生で、来週、初めて上回生とペアを組み、試合に出場する。その喜びと不安が作品の中に出たように思うと説明を加えていた。

「好きな玩具で、気の向くままに」は、差大群にのみ見られたテーマである。この4名の作品は、全体的にまとまりのない印象を受ける。しかし、消防自動車の梯子の先に馬を乗せたり、屋根の取れる家の中に順に小さい家を入れ込んだり、銀色のクリスマスツリーを使用するなど、他の実在する世界を表現した作品よりも、このテーマを持った作品は、独創的な世界を表現しているように感じられた。

差小群の「壁」「さみしい」は、被験者が付けた題である。「壁」とは「手」の上にいる現実の自分と、それを客観的に見ている自分との壁だと説明された。また、「さみしい」は、被験者の気持ちとして付けられた題である。

岩堂ら(1971)の研究では、成人については、

テーマに、特に性差が認められなかった。しかし、本研究では「農牧場・田園風景」のテーマは、男子5名、女子11名( $X^2=3.068$ ,  $df=1$ ,  $0.10 < p < 0.05$ )、「自然破壊」など何らかの危機を示すテーマは、男子10名、女子1名( $X^2=9.0147$ ,  $df=1$ ,  $p < 0.05$ )と性差が認められた。全体的に、女子は和やかな感じの作品を作った。それに対して、男子は、「町村の風景」「農牧場・田園風景」なども半数以上あり、テーマが多彩で、活動性を表現しやすい乗り物類を、女子より多く使用したことも影響して、作品の中に何らかの動きが感じられるものが多かった。

今回の実験的に行なった箱庭では、かなり「見せる作品」を意識して制作されたためか、箱庭製作者の考えているテーマと、出来上がった作品に対して実験者が感じたテーマはほとんどの場合一致していた。次に、テーマはいつ頃決められたかを被験者の解答をもとに分類したが、両群とも、約半数が制作する前にテーマを決めている。また、男子と女子では、女子の方が制作する以前にテーマを決めた者が多かった。「はじめは〇〇を作ろうと思っていたが、こんなになってしまった」という者は、「自然破壊」「壁」「さみしい」などをテーマとして制作した者であった。制作後の感想で、テーマが変わった理由として、現在、自分が置かれている状況や、自分の持っていた問題意識が制作する中で次第にはっきりとしてきたことが述べられている。こういった被験者にとっては、実験的な箱庭も、単に何かの作品を作るというよりも、表現することによって、逆に自分のかかえているテーマを気持ちの中で整理する場になったようである。

#### (6)その他

被験者が自分の作品に対してどのような感じを持つのか、それを満足度の点から「満足」「どちらでもない」「不満足」の3段階で検定したところ、差小群は、自分の作品に満足できると感じる事が多く( $X^2=9.60$ ,  $df=2$ ,  $p < 0.01$ )、2群間に

有意な差のある傾向が認められた ( $X^2=5.66$ ,  $df=2$ ,  $0.10 < p < 0.05$ )。不満足と感ずる点については「空白になった所があるから」、「今見ると、人がいないから」、「使いたいと思った玩具がなかったから、足りなかったから」、「自分としてはよくできた方が、考えたとおりに表現しきれていないから」など、様々であった。

最後に、どんな玩具を好むか、嫌うか、また欲しいと思った玩具は何か、の3点についても質問した。好きな玩具については、差小群、差大群ともに「木」と答えるものが最も多く、種類別使用数の結果と合わせて考えると、大学生の箱庭作品には「木」が重要な役割を占めているようだ。嫌いな玩具については「戦いに関する玩具」「ヘビ」「怪獣」が2群共に半数以上を占めた。欲しい玩具では、「水」「池」「川」「道」など砂を掘れば表現できるものが、玩具として要求されている。本実験では、砂を使用した人数が両群共に、30%しかなかったことと関連があるだろう。以上、種々の点から2群の箱庭作品の比較を試みた。最後に、両群の特徴的な作品例をあげておく。

#### ①差小群 女子 (Y-G D類型) (Fig8)

題は「のどかな農場の一日」と付けられた。「私は、芝生の上で、家畜の世話をしている。並んでいる家は家族の家で、農場を手伝う人達も一緒に住んでいる。砂を掘って、青い底が見えたときは感動した。」との説明である。家や人の向きを考え、砂を使用して積極的な態度で制作した。砂箱全体を利用して、明るく生き生きとした印象を受ける作品である。

#### ②差小群 男子 (Y-G D類型) (Fig9)

「昨日、買ったばかりのバイクで、琵琶湖へ行ったこと」がテーマである。左側は湖、中央が道路で、右側には農家が散在している。制作者は、バス停の近くに立っている男性のペンギンで、隣には、女性のペンギンが居る。これから昼食を摂るところだ。と説明された。砂箱の枠に沿って置かれた小さな家などは、遠近を出すために工夫さ

れたところである。感想では「もっと大きな所に作りたかった。技術的には精一杯やったが、考えていることを全部表現できなかった。」と述べている。多少、表面的で、まとまりのない感じを受けるが、制作者を中心として、広い風景を表現した作品である。

#### ③差大群 女子 (Y-G E類型) (Fig10)

「農場」という題である。「子供の頃から、絵を描くときは、いつもこんな風で、こういう生活が良い。」と説明された。質問には「今は手前から家を見ていて、これから家の中へ入っていくところ。大切なのは、家と後ろにある細い木。周りには、何も置こうとは思わなかった。」と述べている。5分間で、あっさりと仕上げられた。周囲から離れ、ひっそりとした農家といった印象を受ける作品である。

#### ④差大群 男子 (Y-G B類型) (Fig11)

題は「駅のない町」と付けられた。制作者は、左上端の大きな木の根元に寝転んで、そこから、静かな田舎の風景を、ずっと眺めている。と説明された。玩具が左側に集められ、人物や動物のいない表現だが、右側の空白部分は、何かが地中に埋められているような印象を受ける。制作後の感想では「材料だけで見ているよりも、出来上がったものの方が、思ったより現実的だ。」と述べている。

#### ⑤差大群 女子 (Y-G B類型) (Fig12)

テーマは特にない。強いて言えば「自分の居るところ」。最初に、砂を使用し、丁寧に起伏をつけている。「日常的な暖か味のあるコップなど、家具を置いて、自分の居るところができたという感じで安心した。」との感想であった。表現にリズムのある、感覚的な作品となっている。

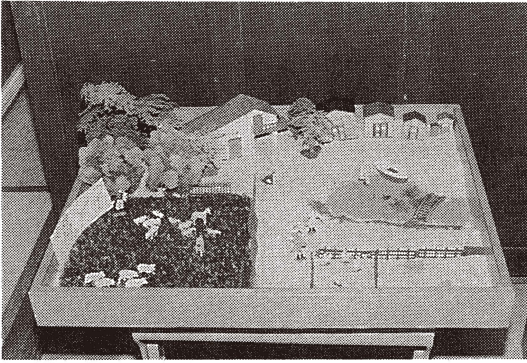


Fig 8 差小群 女子の作品

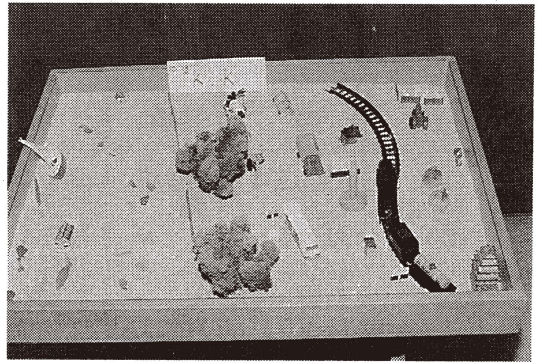


Fig 9 差小群 男子の作品

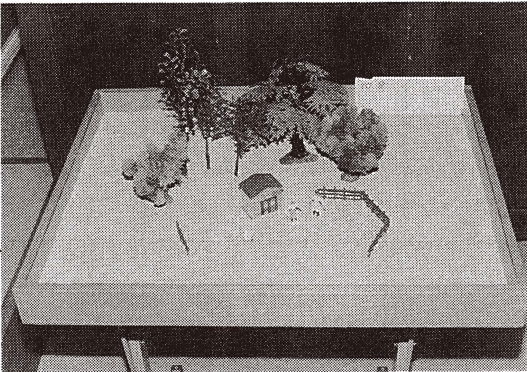


Fig 10 差大群 女子の作品

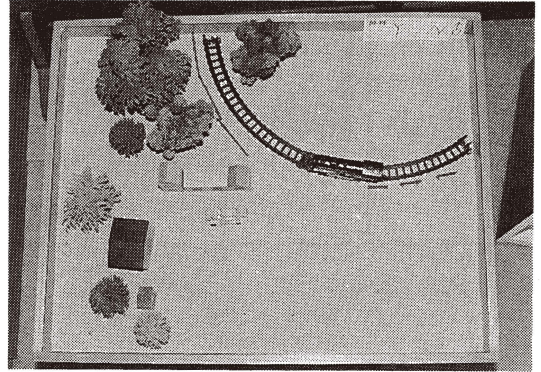


Fig 11 差大群 男子の作品

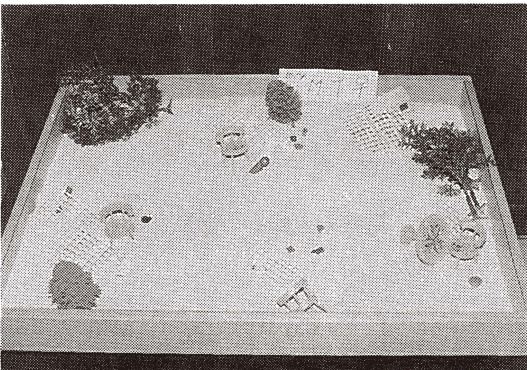


Fig 12 差大群 女子の作品

付表1 差小群と差大群の自分の像とその活動内容

	差小群				差大群			
	男 自分の像	活動	女 自分の像	活動	男 自分の像	活動	女 自分の像	活動
SE	白い男 羊飼いの男 バンダ ペンギン 怪獣 なし	仕事をしている 死んでいる 遊んでいる 食べている 文化財をつぶして いる 歩いている	赤い金太郎 怪獣 なし なし	公園を見ている カメンライダーを 迎えている 仕事をしている ボ-として	白い男 手のない人形 なし(3人)	エサをやっている 見ている 見ている(3人)	女の人 羊 亀 なし	エサをやっている たべている 眺めている 家事をしている
SN	スコップを持 った人形 赤い木 黒い石 なし なし なし(3人)	動物の世話をし ている 木になっている 見ている 食べている ピアノを聴いて いる 散歩している 見ている(3人)	女の人 なし(10人)	家畜の世話をし ている 動物と遊んでいる 馬に乗っている 学校の帰り コーヒーを飲んで いる 読書をしている (2人) ライオンを見て いる 見ている(3人)	怪獣 なし(9人)	ふらふら出てきた 働いている 音楽を聴いている 散歩している 寝ている(2人) 見ている(4人)	女の人 なし(10人)	鳥の世話をし ている 家事をしている 料理をしている ピアノを弾いて いる 眺めている 見ている(5人)

#### IV. 結 論

大学生において、現実的な自分と理想的な自分とのギャップの小さな群（差小群）30名（男子15名、女子15名）と大きな群（差大群）30名（男子15名、女子15名）について、まず、Y-G性格検査との関連を検討し、次に、それぞれの箱庭表現について、種々の点から作品の特徴をとらえた。

(1) Y-Gの結果からは、差小群が差大群よりも安定した、適応性の高い「自分」を感じていることが認められた。

次に、2群の箱庭作品を分析した結果は、次のようなことを示した。

(2) 建造物類が差小群で41.4%、差大群で38.7%と両群共に最も多く使用され、差小群では活動性を示すと思われる動物類(23.3%)が、差大群では植物類(22.9%)が次に多く使用された。

(3) 人間類と乗物類は、女子よりも男子に多く利用されるという有意な差が認められた。

(4) 自我の発達を示すと言われる柵の使用は、差小群がより多く使用し、より明確な形で「自分」を捉えていることが窺われた。

(5) 差小群は「自分」をより活動的に、差大群は、家や木と共に位置づけることが多かった。

(6) 領域の使用は、両群共にMhに、又差小群が右側に、差大群が左側に、玩具を多く置くことが見出された。

(7) 差大群は、箱庭の上部と下部に、より多くの空白がみられた。

(8) 差小群は左上端の領域に、差大群は箱の中心に、第1に玩具を置き、両群共、箱の中心を自分のいる領域とし、かつ重要と感じている。

(9) 自己領域の過去-現在-未来については、差小群がⅧ-V-Ⅷ、差大群がⅦ-V-Vの方向性を

示した。

(10)テーマは、両群共「町村の風景」「農牧場・田園風景」が半数を占め、「農牧場・田園風景」は女子に、「自然破壊」などは男子に多く認められた。  
(11)差小群は、作品に対して、満足と感ずることが多かった。

箱庭療法は、人間の心のどのあたりを浮び上がらせるものなのか、作品のテーマなどにみられた性差の問題や、発達的な立場から、表現されるものを比較していくこと、また、出来上がった箱庭についてどのような意識化を試みることができるかなど、今後の課題として考えていきたい。

<付記> 本論文は、卒業論文を加筆、修正したものである。

#### 参考文献

- 河合隼雄編 『箱庭療法入門』 誠信書房 1969  
岡田康伸 『箱庭療法の基礎』 誠信書房 1984  
岩堂美智子他 『箱庭療法に関する基礎的研究(その4)』 大阪私立大学生生活科学部紀要27 1979  
木村晴子 『箱庭療法に関する研究—Y-G性格検査との関連』 心理測定ジャーナル18 1982  
藤井しのぶ 『子どもの箱庭表現とその変化』 京都大学教育学部修士論文 1976

---

#### ABSTRACT

A Study on Expression of Sandplay Technique — A research on university students

BANSHOU, Akemi  
*Shukugawagakuin Junior College, Konan University*

This paper gives the characteristics about the relationship between Y-G test and Sandplay Technique which was played by the two groups of university students, one is a group with min. difference(15 males and 15 females) another is a group with max. difference(15 males 15 females).

The former were proved to be emotionally stable and adaptable by Y-G test, used more fences than the latter in the Sandplay expression. Subjects of the former expressed themselves as active person in Sandplay, and were satisfied with their Sandplay worlds. Subjects of the latter often placed the representatives of themselves with the miniatures of the houses or the trees. A little subjects of it used the upper and lower of the Sandplay box.

*Key Words:* Sandplay Technique, university students, Y-G test

---